



Title	藤原定家の研究
Author(s)	安田, 章生
Citation	大阪大学, 1964, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/28825
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について <a> をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【 2 】

氏 名・（本籍）	安	田	章	生
	やす	だ	あき	お
学 位 の 種 類	文	学	博	士
学 位 記 番 号	第	5	5	9 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 4 月 9 日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学 位 論 文 題 目	藤 原 定 家 の 研 究			
	(主査)		(副査)	
論 文 審 査 委 員	教 授	小 島 吉 雄	教 授	藤 直 幹 教 授 村 上 至 孝

論 文 内 容 の 要 旨

序

本研究は、従来理解されるところの乏しい藤原定家の文学の特質を考察すると共に、わが文学史上の定家の偉大な位置を明らかにすることを目的とするものである。

第1篇 定家とその時代

第1章 定家の人間像

第1節 経 歴

1 系譜・生没年時

2 官 歴

第2節 経済状態

不如意であった経済状態を具体的に展望する。

第3節 健康状態

病身であった健康状態を具体的に展望する。

第4節 性格・心境

複雑な性格を具体的に見ると共に、晩年、内観的な静けさを増していった心境を展望する。

第5節 生涯の区画

生涯を4期に分ち、第1期（24歳に至る期間、歌の上では父の俊成に学んで作歌していた時期）第2期（25歳から44歳に至る期間、独自の作歌に励み出した頃から新古今集竟宴の年までの時期）第3期（45歳から承久の乱が起った60歳までの期間、作歌力は衰えて歌論の上で大きな仕事をしている時期）第4期（61歳から80歳で死ぬまでの期間、作歌からいよいよ遠ざかり、連歌をたのしみ、古典書写に大きな仕事を残している時期）とする。

第2章 定家の時代意識

緒言

第1節 「紅旗征戎非吾事」という意識をめぐって

治承4年9月、19歳の時の日記に書きつけられている上記の句には、否定的態度を媒介として時代に対し能動的な面を失っていない意識がうかがわれる。この句に象徴的に示されている時代意識は正治元年38歳の頃までつづく。

第2節 「不運之身遇亂代」という意識をめぐって

この句は正治元年8月29日の日記に記されている句であるが、この句に象徴的に見られる時代に対する受動的な姿勢は、この後の時代意識の基調となっている。

結語

第1節で述べた時代意識に支えられた期間に、定家の作歌活動は最も盛んであり、第2節で述べた時代意識に移行して後は、その作歌活動は低調となっている。

第2篇 定家の歌および歌論

緒言

定家の作歌期間は、50数年の長きにわたっており、その歌風も歌論も微妙に推移している。その全期間を、前述の生涯の区画にあてはめて、第1期を初学期、第2期を新風樹立期、第3期を有心体確立期、第4期を晩年期として、その本質を展開の相において明らかにしたい。

第1章 資料について

第1節 歌の資料について

1 歌数

従来の研究を補訂して現存判明歌は3945首（そのうち1首は長歌）であることを明らかにする。

2 制作年時

明らかなもの及び明らかにし得たものを年代順に記述する。

第2節 歌論の資料について

信すべき資料を展望する。

第2章 初学期の歌と歌論

定家は、この期において早くも整った歌風を示して、人々を感嘆させているのであるが、これは、いはば俊成圏の歌風で作歌していたことを意味している。歌論は見るべき資料が存在せず、独自の歌論を末だ有していなかったと考えられる。

第3章 新風樹立期の歌と歌論

I 歌

第1節 達磨歌の根本的特質

それは、非実情的な人間不在の唯美の歌という点にあることを明らかにする。

第2節 歌風の幅広さ

平明な表現の主情的作品、客観的傾向の作品、夢幻的な作品等、その歌風には幅の広さがある。

第3節 艶・妖艶美の歌

その歌が湛えている美も、さまざまの傾向を有しているが、この期、とくにその終り頃において、艶・妖艶の美の歌が目立っている。

Ⅱ 歌論

第1節 定家歌論の出発点と基調

28歳の時に判した宮河歌合の判詞中の西行の歌に対する批判言に、定家独自の歌論の出発点と基調とが見られる。

第2節 四十歳前後の歌論意識

1 千五百番歌合の判詞に見える歌論意識

艶の美意識の尊重確立、詞は古き歌にならび心は新しいことの自覚、詞を尊重することの確認が見られる。

2 後鳥羽院御口伝からうかがわれる歌論意識

42歳当時の定家が、体験にもとづく実情的詠風とは反対の詠を志向していたことがわかる。

第4章 有心体確立期の歌と歌論

緒言

定家は前期の39歳頃から歌に倦み始めているが、この期に入って、その傾向はいよいよ強くなり、作歌教は減少し歌風も変化している。また、自作に対する反省のもとに、すぐれた歌論を残している。

I 歌論

第1節 正統性への回帰

前期の歌および歌論において異端性を示した定家も、48歳の時の述作である近代秀歌では、正統家風への回帰を強調している、これが、この後の定家歌論の根本となる。

第2節 有心体論

1 和歌+体と有心体

有心体は、この期に確立された定家の歌の理念として重大な意義を有しているものであるが、毎月抄に説かれている和歌十体のなかの有心体なる概念には、各体に価値を与える価値概念としての有心体（広義の有心体）と、十体のなかの至高の体である様式概念としての有心体（狭義の有心体）とがある。

2 広義の有心体

やさしくものあわれなる姿の歌が有している抒情性という意味に解せられる。

3 狭義の有心体

心（内容ないし実情）を重んじる立場と詞（表現ないし技巧）を重んじる立場とを止揚した境地においてとらえられた最高の様式概念であると解せられる。

4 三体和歌に絡む有心様の用法と定家の有心体

両者を比較して、その相違点と通じる点とを検討する。

5 定家より後の歌論書に見える有心体論

井蛙抄・ささめごと・東野州聞書に見える有心体についての解釈を検討する。

第3節 選歌・歌合の判詞に見える歌論意識

緒言

1 近代秀歌・秀歌之体大略の秀歌例について

上記の書の秀歌例のうち、新古今集所収歌をあげて、それぞれの異同を検討すると共に、新古今集撰集の際の定家の選の有無をも検出することによって、この期の定家の歌論意識が新古今風を超越していったことを明らかにする。

2 定家十体・二四代集・定家卿百番自歌合の選歌について

上記の書の選歌を検討することによって、前述と同様の結論が出ることを明らかにする。

3 歌合の判詞に見える歌論意識

この期の歌合のうち、判詞が残っているものについて検討し、やはり同様の結論が出ることを明らかにする。

Ⅱ 歌

平明な表現、平淡の美のものが主流になっていることを明らかにする。なお、この期に万葉調の歌が若干あることに注意し、定家と万葉集との関係を検討して、その万葉調の歌は実朝の影響によるところが大きいことを推定する。

第5章 晩年期の歌と歌論

I 歌

作歌の情熱はいよいよ衰え、質量共に貧しくなっており、平明な抒情性を増していることが認められる。

Ⅱ 歌論

第1節 妖艶美の尊重と新勅撰集の歌風との関係

定家の妖艶の用語例を検討することによって、その概念を明らかにする。そして、それがこの期の歌合の判詞において尊重されていること、新勅撰集の歌風とのあいだに存する矛盾について考究し、明月記その他の記によって、定家の真意を明らかにする。

第2節 定家歌論の変らざる基調とその志向

優艶の美意識が流れている、姿・詞の趣を大切にしている。作歌態度の根本において実体験や囁目の景物を超えて詩の世界を造型するというのが、定家歌論の変らざる基調であり、そのことからして、象徴主義的な志向をつねに有していたことを明らかにする。

第3篇 定家とその周辺の主要歌人

第1章 西行と定家

第1節 西行の生涯と定家の生涯

両者を、生活環境・性格・健康・時代環境・歌への尊信という観点から比較して、その相違を明らかにする。

第2節 西行の歌と定家の歌

1 発想法についての両者の意識

西行は、歌と実生活を一体化し、敬虔な宗教心を背景として、現実随順の態度で作歌している点、

定家と対照的である。

2 西行の歌の反定家的な特色

即興性・実情性をその根本的な特色としている点において、西行の歌は反定家的であり、また、時事歌を少数ながらも詠んでいる点においても異なり、思想性を多分に有し、表現が自在であり、清澄美を湛へていることが多いという点においても反定家的である。

第3節 定家の西行評

1 宮河歌合の判詞をめぐって

定家は西行の歌の特質をよく理解して西行を感激させると共に、自らの歌風とは異なることをも自覚して、その点は不満としている。

2 西行の死をめぐって

西行の安らかな死を聞いた定家は、感動して歌を詠んでおり、その翌年にもそのことに触れて良経とのあいだに歌を贈答している。

3 中世歌論書が伝える批評言をめぐって

八雲御抄その他が伝える定家の西行評を検討し、定家が西行を尊敬しながらも、俊成よりは低く評価していたことを明らかにする。

4 新勅撰集の撰歌をめぐって

新勅撰集に撰入されている西行の歌14首を検討し、その作品が西行の特色を十分に発揮しているものとばかりはいえないこと、その歌数も多いとはいえないことからして、定家の西行理解の限界を明らかにする。

第2章 俊成と定家

第1節 俊成の生涯と定家の生涯

俊成の生涯は、早く両親失ったこと、恋愛の成功者であること、健康に比較的恵まれていたこと、公的生活においては定家より不遇であったこと、温厚な性格であったこと、歌壇の地位を確立したのは晩年であったこと、幸福な晩年期であったこと等において、定家と対比される。

第2節 俊成の歌論と定家の歌論

1 両者の相違点

(1) 心と詞の問題

俊成は定家よりはるかに強く、心を根本とし、詞を第二義的に考えている。

(2) 美のとらえ方の問題

俊成は気分的に直観し、定家は知的に把握する傾向が強い。

(3) さび・ほそし・艶・妖艶をめぐる問題

これらの美意識について、前二者は俊成には多く見られ、定家には殆んど見られないことを指摘し、後二者は俊成・定家共に有力に現われてはいるものの、俊成のそれは王朝的な性格のものであるのに対し、定家のそれは中世的というべき性格のものであることを明らかにする。

(4) 幽玄をめぐる問題

俊成の幽玄が複雑な意味内容を有しているのに対し、定家の幽玄は、より単純であり、俊成の

幽玄の一要素である「さび」の美意識を主として継承している。

2 定家の俊成への回帰

(1) 定家の俊成批判と俊成讃美

定家は明月記のなかで千載集の風体およびその編集上の杜撰な点を批判している。また、後鳥羽院御口伝は定家が俊成の歌を軽んじていたことを伝えている。しかし、井蛙抄その他は定家が俊成の歌を讃美していたことを伝えている。定家はその晩年に若い日よりも俊成を讃美するようになったのだと考えられる。

(2) 定家歌論への俊成の投影

定家の歌論中、俊成の影響を受けていると思われる箇所、また、俊成の意見を祖述している箇所を明らかにする。

第3節 俊成の歌と定家の歌

1 俊成の歌の抒情的性格と定家の歌の構成的性格

俊成の歌は人間的な抒情で統一されていることをその根本的な特色としており、それは定家の歌の非実情的構成的歌風と対照的である。

2 さび・ほそし・艶の美から見た俊成と定家の歌

「さび」「ほそし」の美は、俊成の歌には多分に見られ、定家の歌には乏しい。ただ、俊成の歌においても、この美は晩年にはうすれ、それに代るに、艶の美が強くなっている。そして、その艶の美も俊成の歌論に見られる艶を具現したものである点、定家の歌の艶とは異なるものがある。

3 俊成と定家との交流

定家が俊成から受けているものと、俊成が定家からの影響を受けたと思われる点とを明らかにする。

4 俊成・定家比較論

諸書に見える俊成・定家比較論を展望する。

第3章 式子内親王と定家

第1節 内親王と定家との交渉

定家が内親王の所へ初めて参上した時から内親王が亡くなられるまでの間の二人の交渉を明らかにし、両者の間には特別の親愛の情が存在していたこと、定家の作歌に内親王の影響があることを推定する。

第2節 内親王の歌と定家の歌

両者の歌の共通する性格として、もみもみとある姿・粘りのある調べ・とくに恋歌に秀でる、という点をあげることができ、相違点としては、内親王の歌には定家の歌よりはるかに強い抒情性がある。清澄美の湛へられているものが多い、という点をあげることができる。

第3節 定家の内親王評

二四代集・秀歌之体大略・新勅撰集に撰ばれている内親王の歌を検討し、定家が内親王の歌を高く評価していたことを明らかにする。

第4章 後鳥羽院と定家

第1節 院の生涯と定家の生涯との交流

院は定家より18歳の年少であった。そのことは、両者が時代環境から受けた影響を微妙に異ならせている。また、両者は性格的にも対照的なところがあり、やがて感情的にも衝突して、晩年には絶縁状態となっている。

第2節 院の定家推賞

定家の歌が歌壇の第一線に進出したのは、院の鑑賞眼に叶ったためであり、新古今集撰集前後の院は定家の歌を最も高く評価されていたことを明らかにする。

第3節 院の定家批判

院が定家の歌を推賞されていたときも、両者の文学観は根本的に一致していたわけではなく、そのことはやがて表面化し、後鳥羽院御口伝で痛烈な定家批判が述べられている。院はわが歌論の正統的な立場に立って定家の有している異端性を批判されているのである。

第4節 院の歌と定家の歌

院の歌は、おほらかで、よく通っている調べ・ゆたかな抒情性を有している点に特色があり、定家の歌とは対照的である。

第5章 家隆と定家

第1節 家隆の生涯と定家の生涯

両者の生涯で似ている点は、ほぼ同年齢（家隆が4歳年長）で共に80歳まで生きている。幼ない時から歌才を示し、同門の俊秀である。当時の歌人群中最も専門歌人といってよい。歌壇的に広く認められたのは30歳代の後半である、ということであり、相違点は、家隆は比較的平安な生涯を送っている。家隆は後鳥羽院と最後まで親密な交流をつづけており、定家のように圭角の多い人物ではなかった、ということである。

第2節 定家・家隆並称・比較論

両者を並称・比較している文献を調査展望する。

第3節 家隆の歌と定家の歌

両者の歌は巧緻な表現力という点では似ているが、家隆の歌は、より単純な歌風で清澄な歌境の作が多く、より抒情的で死の直前まで作歌しつづけている点において異なっている。

第4節 家隆の歌論と定家

家隆は定家のように歌論的述作を残していないが、諸書に見られるわずかな資料からうかがわれるその歌論の中心は、定家がその中年後に確立した歌論と同方向のものである。両者のあいだに考えられる相互影響について検討する。

第5節 定家の家隆評

諸書に伝えられる定家の家隆評、明月記の家隆関係の記事ならびに新古今集・新勅撰集における定家の家隆の作の撰歌ぶりを検討して、定家が家隆を高く評価していたことを明らかにする。

第4篇 日本詩歌と定家

緒言

第1章 定家と当時の歌壇

第1節 当時の歌壇の定家評

前篇で述べたところとの重複は避けて、当時の歌壇の定家評を展望する。

第2節 心と詞との関係から見た定家と当時の歌壇

1 歌論について

顕昭・俊恵・長明・上覚、後鳥羽院・順徳院等の意見を展望し、それらが歌の根本としては実情主義を取る立場のものであるのに対し、詞への強い執着を示している定家の歌論の特異性を明らかにする。

2 歌について

いわゆる「歌づくり」的性格を有している定家に対し、当時の多くの歌人が本質的には「歌よみ」的性格を有していたことを明らかにする。とくに慈円・良経との対比において、そのことを検討する。

第3節 美意識の上から見た定家と当時の歌壇

1 歌論について

歌論書・歌合の判詞から当時の人々の美意識を検討し、艶・妖艶の美は俊成・定家および二条派の歌人の美意識の最大の特徴であること・俊成の艶とは異なる定家的艶は、千五百番歌合の後に漸次に歌壇に滲透していったこと・妖艶の美を定家のように見事に発掘しているものは他にないこと、を明らかにする。

2 歌について

歌においても、艶の美の開拓者は二条派の若い歌人であり、定家的艶・妖艶の美を見事に示しているのは、定家その人であることを明らかにする。

第2章 和歌史と定家

第1節 和歌史における「中世」の意味

1 和歌史の史的区分

和歌史を三分する場合には、古代を万葉集から拾遺集まで、中世を後拾遺集から細川幽斎の頃まで近代をそれ以後と見たい旨を述べ、中世和歌の範囲についての従来の諸説を検討する。

2 古代和歌の特色

それは、歌が現実体験に密着して即興的に作られることが多く、そのようにしてできた作品にすぐれたものが見られる・作者の人間感情が作品の上に比較的によく現われている。いわゆる心と詞とが比較的容易に短歌形式のなかで調和している、ということである。

3 中世和歌の特色

古代和歌的発想法ではすぐれた作品が作れなくなったところに、中世和歌の時代が始まるので、そこでは即興的ならざる題詠が盛んとなり、象徴的性格が深くなっているまた、釈教歌が盛んとなり、仏教とのつながりが作歌態度の上からも強くなっている。

4 近代和歌の特色

中世末期の和歌・歌学を否定するところから始まった近代和歌には、古代和歌的性格が復活している。

第2節 中世和歌と定家

1 二条派の定家理解

為家・為世を初めとする二条派の定家理解を、歌論書および撰集から検討し、定家の特色・真価を十分に理解していないことの多かったことを明らかにする。

2 京極派・冷泉派の定家理解その他

為兼・花園院・正徹・心敬等が定家の特色・真価をよく理解し、定家に学ぶところが大きかったことを明らかにする。

3 中世和歌の二潮流と定家

中世和歌の二潮流とは、古代和歌の性格を継承している見様体・眼前体を尊重する流れと、構成的・抽象的発想法の流れとである。後者は定家が切り拓いた流れであり、そのなかから中世和歌独自のすぐれた作品の多くは生まれていることを明らかにする。

第3節 近世和歌と定家

緒言

第1節で近代和歌と称した時期を、便宜、いわゆる近世和歌といわゆる近代短歌とに区分して考察する。

1 定家の「駒とめて」の歌をめぐる評価

宣長・正明・真淵・宗武・知紀等の評を展望し、諸説いづれも定家の作を十分に理解していないことを明らかにする。

2 宣長と定家

宣長は、定家を高く評価しているけれども、実情主義の立場から定家の歌に対しており、その本質を十分に理解しているとはいえないことを明らかにする。

3 その他の定家評

正明・資芳・芳樹等の定家評を展望し、結局、近世においては、定家に対する深い理解がなかったことを明らかにする。

第4節 近代短歌と定家

緒言

1 定家に対する否定的批評

近代短歌の主流を形成した実情主義的・現実主義的方向を推進した正岡子規・伊藤左千夫・島木赤彦・斎藤茂吉等の定家に対する否定的批評を展望する。

2 定家に対する肯定的批評

与謝野寛・晶子・太田水穂・川田順・北原白秋等は、定家に対する肯定的批評を述べているけれども、その理解は十分でなかったことを明らかにする。

第3章 歌論史と定家

緒言

定家歌論の異端性と正統性については、第2篇において考察したのであるが、改めて歌論史的展望のもとに、問題を3点にしばって考察する。

第1節 心と詞の問題をめぐる

詞を専重することの強い定家の歌論が、歌論史上いかに特異な存在であるかを明らかにする。

第2節 艶・妖艶の美意識をめぐる

定家の艶・妖艶がいかに独自のものであるか、また、彼以後、その美意識は為家・正徹・心敬・兼良に受け継がれているものの、定家におけるほど有力且つ鮮明ではないことを展望する。

第3節 方法論の問題をめぐる

非実情主義的・構成的方法の定家の方法論が、歌論史上いかに特異なものであるかを展望する。定家以外で、この方法を明確に述べているのは正徹のみである。

第4章 連歌史・俳諧史と定家

第1節 定家の連歌作品

明月記の記事を調査して定家と連歌との関係を展望し、現存の作品は菟玖波集に撰入されている24句であることを述べる。

第2節 定家の歌論と連歌論史

定家の歌論が影響していることの指摘できる連歌論の記述を調査展望し、良基・心敬・宗祇等のすぐれた連歌師たちは、定家の歌論が含んでいる正統的性格を継承していることを明らかにする。

第3節 定家の和歌と連歌史

定家の和歌の疎句的表現・象徴的性格が、連歌の文学性を高める上に与えた影響を明らかにする。

第4節 芭蕉と定家

芭蕉は、定家を一応尊敬しながらも、単なる才気に終りがちであるという弱点に注意している。そこに、定家よりも現実主義的な詩作態度を持っていた芭蕉の特色が見られる。

第5章 近代詩と定家

近代詩人中、萩原朔太郎と立原道造とは新古今集・定家に共感を示しており、道造には定家の歌を踏んで作られた詩作品も見られる。定家へのこのような共感は、昭和期の混乱した時代環境を背景として現われたものである。

附 説 茶道と定家

第1節 茶道の精神と定家

茶道はその芸術精神の支柱を歌論から多く得ているが、とくに紹鷗・利休・織部等は定家の歌・歌論から学ぶところが大きかったことを展望する。

第2節 名物としての定家の書

定家の書が茶道の名物として尊重されている史実を展望する。

論文の審査結果の要旨

本論文の意図とその構成

本論文は藤原定家の歌ならびに歌論の特質を考察するとともに、わが日本の詩歌史上における定家の位置ないしそこに与えられている定家の影響を明らかにしようとしたもので、その論の構成は、次

の如くである。

第一篇 定家とその時代。(定家文学の母胎となった定家の人間像とその時代意識とを考察する。)

第二篇 定家の歌および歌論。(まず定家の歌および歌論に関する資料吟味考証から出発して、定家の歌および歌論の特色を展開の相ととらえ、時代によって微妙な変化を示しながら、なお不変の基本的特色のあることを明らかにする。)

第三篇 定家とその周辺の主要歌人。(定家とほぼ同時代に生きた主要歌人たちと定家との交渉を跡づけるとともに両者の文学的特色を比較することによって、定家の文学と歌論との特異性を明確ならしめる。)

第四篇 日本詩歌と定家。(定家がわが日本詩歌史上いかなる位置を占め、また各時代においていかに理解せられて来たか等を考察し、大きな影響を後世に与えていることを明らかにしている。)

附 説 茶道と定家。(日本芸能史の上にも定家の影響の大きいことを茶道に例をとって論証している。)

本論文の要旨

文学的資質にめぐまれていたけれども、病弱であり、神経質であった定家は、転換期の時代に敏感に反応を示したが、その苦き日には、詩人としての自覚をもって時代に対する傍観者の態度を執りながら、しかも乱世に生きる者の強い決意を示し、中年以後は乱世に当面した不運の身を徒らに嘆くという。時代に対する受動的消極的姿勢を示した。こういう時代意識の変化が彼の創作活動にも反映して、若き日の彼は、活発な作歌活動を示し、いわゆる達磨歌といわれる新風を樹立した。ところが、中年以後においては、この新風に対する情勢がうすれて行き、創作力が減退し、代って自己反省が行なわれて、歌論が盛んに発表せられた。

ところで、定家の新風の根本的特質は、知的で構成的で、非実情的な、人間不在の唯美的歌風であることであるが、この歌風を支えるものは、詞をいたわり、そのいたわられた詞を通じて風情が現われるとする、いう所の実情主義否定、詞尊重の歌論であり、この歌論からみちびき出された定家独得の艶の美意識がその歌風と深いつながりをもったのである。その後、定家が四十八才から六十才までの間に発表した歌論では、詞を重んずる従来の立ち場に立ちながら、心の側からの反省を加えて、より叙情的な歌風尊重の傾向を示し、六歌仙時代を継承しようと志向して、和歌の正統性への回帰を示している。そのことは、この時代に確立せられた有心体論に最もよくあらわれている。けだし、中年以後の彼の歌が平明平淡に傾いていったのは、このような歌論意識の投影である。そして、その歌は、晩年になるほど、より平淡になり叙情性を増加してゆくが、その歌論の上でも定家の艶が超現実味を加えて、いわゆる妖美の主張となり、巧緻な表現を尊重しながら、より実情的な発想、より平淡的な美意識へと傾斜していったのである。こういう風に定家の歌や歌論には時代によって微妙な変化推移が見られるのであるが、その中になお変らざる基本的な特色があった。それは、姿媚をいたわり大切にしていることと、作歌体験の根本において自己の実体験や囑目の景物を超えて非実情的に造型するという態度とであった。

この基本的特色は、同時代の他の歌人と比較するとき、彼が全く特異な存在であったことを示すもので、当時は、歌論においても歌においても、心・詞の調和を理想とする実情主義が主流となってい

たのである。

和歌史を展望する時、古代和歌の基本的性格は、歌が現実体験に密着して即興的に作られ、作者の人間感情が作品の上に比較的よく現われており、内容と表現とが比較的容易に短歌形式の中で調和している点にあるが、中世和歌にあっては、この古代和歌的発想と、これに反対する、現実体験に密着しない、構成的抽象的な発想との二潮流があり、そして、後者が中世的性格を代表するものというべく、定家は、この中世的性格を確立し、これを代表した人であるということが出来る。しかしながらこの定家の発想とその美意識とは、中世から近代に至るまで、完全に理解せられること少なく中世では僅かに京極為兼や正徹らがこれを理解し継承しようとしたのみで、近世および近代のように実情主義の時代において、定家はほとんど理解されていない。ただ近代詩人のうちで、萩原朔太郎と立原道造とが定家に深い同情と理解とを示したことは、注目すべきである。このように、定家は理解されることが少なかったにもかかわらず、和歌史や歌論史の上にも連歌や茶道の上にも大きな影を投じているのである。

以上が、その論の要旨であるが、つまり、本論文は、わが詩歌史上もっとも特異な存在であった定家が、その存在を除外しては、わが詩歌史さらに広く言えば芸術史を考えることが出来ない大歌人であることを、その文学的持質とその史的地位と明らかにすることによって実証したものである。

本論文の特色と価値

本論文の特色として、もっとも顕著な点は、(一)論者の視野が極めて広く、日本詩歌史の全分野に及んでいて、その博識と立論材料の豊富なことは驚くべきものであるということである。しかも、その取材の上に論者の見識のうかがえることは、多とすべきである。また、(二)理路整然たる論旨とその犀利なる批評眼とは、本論文の大きな特色である。定家の歌風の変化について、また有心体論の解釈について、論者と異なる見解を有する研究者も、本論文には耳を傾けるであろうと思われる。

なお、本論文における創見は、一二にして止まらないのであるが、その最も特筆すべきものは、(一)定家の時代意識について精緻な解釈を施し、それが定家の作品や歌論の上に反映しているとした点、(二)定家の歌や歌論の上に変化を認めながらも、なおかつ不変の特色の存することを発見し、その特色を人間不在の非実情性という点に結集させて、その観点から定家を日本詩歌史上に位置づけた点等である。

思うに、藤原定家に関する研究は、大正末年より活発化し、爾来今日まで非常に多くの研究が出ているが、その多くは、彼の伝記的研究や著書の書誌学的研究であり、また彼の歌論についての研究も盛んであるが、その歌論や作品の本質についての論究は、案外その数が少ないのである。また定家が後世に影響するところの大きい歌人であったことは、今では常識となっているが、それがどういう風に影響し、どういう風に後世に受けとられたかについては、具体的に詳細に明らめたものがなかった。本論文は、従来の研究のこのような盲点をついたもので、定家の本質を見きわめ、詩歌史ないし芸術史の観点から定家を位置づけようとして、よくその目的を達し得たものというべきである。

ただ、もし蜀を望むならば、時代により、また人によって、定家の受けとり方に微妙な陰影の差があるはずであるが、そのような陰影差の追求で本論文では未だ十分でなく、また茶道における定家の影響のほかに、能楽その他の芸道にも定家の影響があると思われるが、それらについても十分論及さ

れていない点を指摘しなければならない。しかし、これらの問題は、本論文の論旨の直接関与しないことであるから、このことは本論文の価値を傷つけるものではない。われわれは、それらの点については、論者の今後の研究に期待しているものである。

結 論

以上、本論文を審査検討した結果、本論文は、定家ないし日本詩歌史研究の一道標となるものと考え、文学博士の学位を与えるだけの価値あるものと信ずるものである。